



門へ 13
1089
巻 4

七
與



心

金玉神ぢぬを巻く回

多きれ親乃山

天文乃比さう公家の青傳二人法朋輩れ中よ
別て保く交つとたづひは死べ一處といひし
て兄弟れちさうとさうなりさる物より一人乃
のその盛衰之常なるを親トはむの
海とて朋輩よ物とさうハ世をさ人れをよあ
百年二方六千日乃光陰ハ奔り下海の末れ
加一ハ内小浮雲の氣と稱しハ地泡乃雲を
あつめて雲電ハ身と身ハハ新ハハハハ

義方のつゝまきう百事を備へんははつるの身
と名利のふははつるまきうぬくははつるの身
一せとせむじらうあひな兒りばあまき種と
よは道してせうあまき種とせむじらう二家之種
あまき種とせむじらうあまき種とせむじらう
なれぬ事とせむじらうあまき種とせむじらう
と離れ事とせむじらうあまき種とせむじらう
しとせむじらうあまき種とせむじらう
れらむらとせむじらうあまき種とせむじらう
得り余なりて二家立るん事とせむじらう

を思ひあされんれらうハ直が一付と其日とし
て二通乃廻向とせむじらうあまき種とせむじらう
はは人二つてせむじらうあまき種とせむじらう
起我とせむじらうあまき種とせむじらう
を何らそのとせむじらうあまき種とせむじらう
勢公とせむじらうあまき種とせむじらう
色一蓮花とせむじらうあまき種とせむじらう
く髪とせむじらうあまき種とせむじらう
義知と改め今一人の春書と呼んでいらまき種とせむじらう
とんどうよたあひすぬ一それらうあまき種とせむじらう

せ後行一まづ東あせせらへんわらう國別
 の外乃ほぬのうあうねまふれ浦くく修く
 まで悪く一見一其幸をこれ平ら喜を立
 ちを色秋凡色立ばせれあり一國作勝と
 こらぎ一て一まづ都ふのうらぬさこの道
 乃後分れば強はれあよれにて毎士せんしき
 れ志一あうらばあさき一わらぬ柳山
 八枝葉あ一乃名山まよまは界沖北智大昆
 盧遮那佛ちんたま一く粟教意地
 乃降玉なれば火れ瑞合まへハのあ降

世の人せんしきすまへはぬくありあは
 事柄一ゆるふ二人れ道公あ家れ身ハ降穢
 ありとぬるをこあり也縁なきハ別行別
 ありあれた兒あもあうらぬあ小葉の屋を
 合て山のき一兒をらへあり一あはれて
 一息乃腹をなく一掌ハあかよ志のらで空小
 あうら送らあまうらふらて天よかけ橋
 どうよふ田強や著くまう一氣ら山と
 てあま二河は時ちら送たあ小別れてはき
 と山らうまを新とりあうあうあされ三人



金王禪院の巻之二

三

前後とありしてぬりてはあやとあひ共
 目をやうくよすれぬ結きごもあじいふやと
 こそなくかあこゝあせし程よとま山陰
 小松乃生怪とくあておきけり小松なりと
 ちかぬありし秋乃折産れ隊ありと灯乃紅
 りうおて人の言なひいさこに二人は法師
 もろこひあみきと押あけては秋乃高を救
 りんと目のやうす秋霧くはあひまや作り此
 梅やとふれいよまうし其は海なるぞ一此
 けを裡ぐり一書巻のしやじをわけ誰

して平はうらあや屋一人灯乃切小早とこ
 てん妻小早能とむらげ縁入らありとあ共
 うらうらとせふたごひなく八十程好小早二相縁り
 梅仙露乃十弁う宝葉文れを真うりつとあこ
 界れ此女なうべううは都乃山中おか絶の真
 女のすむ事一人らこらんは其あふ人れ絶絶を
 見えん勝よこたぬ一此あをな一二人乃法師
 たのひをうらとせめて是ハ鬼神こゝあの子女
 こゝあて道徳とけあひげをり一愛敬乃心を
 おこいば其たの心を窺あてりまをを害せ

金瓶梅詞話

んるふあはれのうけをきつら二人がせむら
うたうへへるものなるべし—
室をれづきんころいふ喜ぬりやくうへは
かつてえあううきか後化なるがたえ
たうこそれがれせド—
あまを二の徳は種なきが
細とろ—世をえん宿と二人のよ
のさびくまうと残くは
があません—やうは道よあまひ
くれ卯はあまひ者なり—

せとれて一病は看せり—
ろさたるき—
機は諸女—
あまは法縁のる宿—
あひある—
る事小は向あつせん事—
り—
人れ道公—
者あませよ—
あはれを

さんご昔一うばあはれ此は海とてこれ中
 得たりなまのり一とちバ女りさるはあち
 色情志れる人せりりして縁人を痛りり
 結うぬれは出傍は出着とあせゆ半る守中
 色こちのハる一うばあはれはか一あまればこ
 ちあ入出入とて一同なるを数へ得ト一
 合のゆきぬと立切それよはやすみゆとて又
 元は良基よ何ひ早強ゆ深入ぬとておの
 あらととんれは病れ志とて後新の御衣
 一ぬるまで一ぬびやうあとの女よ入る此敷

よわははるぬれすのうばあはれ乃絶のうかんれ
 のせれうちらまはうとておはうのぬれ一
 てはのゆく縁起のうとてある一はあまを
 ある一とらあしやれ者あうあんゆびと
 せはぬあはぬせとあべ一と護れはと法び九
 家と切らして二人のあま一色はぬらうま
 てやぬれ半のあうらとて今やくとあら
 飛けきとぬれ一とてぬれぬらぬらぬら
 りづくぬれなぬれとぬれぬらぬらぬらぬら
 二人あや一ぬきとぬれぬらぬらぬらぬらぬら

使いし物れなり。一とて是も舞化りし
 あり。一とては窺ひ申されば、
 龍せんく。一とては、
 鳴やとねる。一とては、
 ず。一とては、
 あり。一とては、
 向く。一とては、
 向來れ。一とては、
 を獲。一とては、
 今。一とては、

ひ。一とては、
 轉。一とては、
 讀。一とては、
 海。一とては、
 二。一とては、
 一。一とては、
 一。一とては、
 一。一とては、
 一。一とては、
 一。一とては、

よ疾くこころの傍一徹乃流るんよまことこころの
と滅一徹のほけ昔書と海ぬるるべとあり
くくくそひひそてはぬくふりてあり一せれの二
ふれ道心とてこそ君中いふは出方れ困病ふ
てくそ此のふの作せ給お我やれ名をばあのをせ
給とていハ支ぬこりよ同とてうちりふつけて
はづぐう一せれどせれぐ一はたれる我の十弁
祿成これある者ハ大祿のころテハうめくごハ
我がる京の家とこころ一うと惣總ハ教百羅の書
のふもろの邪信の悪よりいきてあくまぬ

道は有りこころを交結するなりはらるあても
乃又尋時定ぬるをせうあり細根不すんで毎
日は元後後乃功カお引き今人るお立海
甲別信乃初ニ于國れありト本回晴信入道
信と云となりり給きこころ隔生るゆ七れ現
ふのひて前生れまことまのれくハ内傍分事
を傳へく遊書とあり一我信とこのせ成傳
成均せ一わたぬと別なり不金れ目考を斤
一死あり一二人れ信おわくてのりや書
いさう交ぬれば暫くはどろみつらまをばら

一たぢりませと曰人一毒ふるく物くねめく
 ぬれおれとらとて格とりのいげとあらせられ
 八回阿座作れやうとて人一一格おぬの
 とれりあるべしとて思ひ一の若るくた
 存儀乃まふ二人先給とていふてやうとあり
 乃下向道よ並不甲利へ立幾へ平此目おとせ
 等く在れ色とてとてまの信とすおらち
 多て懐中一のり目書とて一一死お一今
 此片一お合てんまの金とてりやうと一具一
 て分とてとてとていふれば倍とてなみとてとて



金部かついでとて

ては忠霊此つらせんのため子部此経を書寫
して千倍と學して多し其後々の二之此倍
とさるゝとしてなり一都へたつる處にねされハ
信玄親乃お不動一ぬ大おの何とて目貫乃
一果一たまはべとて世不難れとせうことりつて
わくまで信ぜられうと世の同派と尋れ
ばびんたんとやれあつ梅一たれよとあざう
信りろく用けとも信よ其ゆびとん信
く七月あよ信くたのまこと信てあけけ
おけり一此目あつとあざうと信りろく何と

うみ細あつて一そ信へはよとせお細一
流ひ一う今れあねいと一果せ一故う一うひ
をなくせうと不用ひあひ一とあう一うは
奇物とれり一と有田法者三一威佛れた
り一難有うるとも信事とせなり

若狭祖冊

若狭越前お契能登越中又うあつるを
しりさう一して信事とさうあね一人此能あつ
あみ十ばうとあみ入てあつらハ若狭れと
一暇中ハ信く老うて書つしあつるをたう

はあむしのはさうして獲るをあらうに
あうつこのふしで所ふ二匹の糸を裁ていけ
侍時ハ獲るを撫と撫と撫と撫と撫と撫と撫と
色恐るさうふあつてや敵山中ハ侍と
まどろくに寝百騎りしてたのまじや年と
まどろくをたれく山は侍でうらとと人よ見
せすや八里遊ぬあてたうく見ん人ありあ
れの人をたれくハあまをたう侍他女をたう
は山侍をたれくは若人あつたあううーげよ
んあううーあ年十年よあううーああうううて

あはする事ありうらと世の事とさういひし
あり新婦よすむこえんて先ハちまに侍
乃善死別して金ぐ傍乃藤城一文字親王并
新田此一族自室はゆらにせはぬ阿彌乃ふえ
司がさうひなに働ホ今えんやうあお徳に侍
世の人凡生刺貫ぐ老母乃なれる果とりてた
ああはたをば越中北山伏越前をわう獄へ
せんトさし山中をけ焼ふあり山伏よひ
うけて暫くあはし一は身ハ他侍をば一や
獄の種よあくと命なる焼こくしてらあう

鏡を其極人ぞとてたごせんと命に承くよ
 のひうに梅うに病ひをなく蓮をねげすわを
 うすぬに慈をなくたり一みをかなく慈をか
 く念をわうにう病を百星百つとれ送すを
 けうと行んまわぬゆふにんをねばらぬれど
 色空ととび水とゆらと海がうぬ一たりの
 勢とくわうに昔経たや若後乃水澄不浄で
 一人は換前と親ありとけ病山ありあて浦よ
 物とたまご毎日我を盛立ありて父とこの不
 成のこ候りぬわの耐前我すむ山守の世後と

ちかれ月乃りろ色一一の異は何家なり
 く喜入はらろ美をうつろ美はまた一か
 わりまのて替くなくこい候とてらざるひ
 物ぬちと親とこのよ中入はあてえれはせ
 ちれり一ろと何家なりはは西の国この見
 へたさをうら唐海ふまはぐと一思あはるの先
 なりの玉存ふして又もれ老くまの一人侍らま
 ちみぬ唐本外てはぬぐれやわれぬ美を
 らせうせんたんは樹るあり是音はみ和
 てくんと候り脚の音は音あのとく不似く

云々不仙候不（二）や失（三）と成（四）く行（五）くちりやれ
 生（六）の由（七）一（八）川の宿（九）を由（十）人（十一）を（十二）抱（十三）て
 竹（十四）を（十五）以（十六）て建（十七）た（十八）く其（十九）初（二十）う（二十一）く（二十二）り（二十三）幸（二十四）と
 言（二十五）さ（二十六）い（二十七）く（二十八）の（二十九）こ（三十）の（三十一）物（三十二）は（三十三）と（三十四）言（三十五）ふ（三十六）人（三十七）を（三十八）抱（三十九）て
 一（四十）て（四十一）あ（四十二）と（四十三）を（四十四）ち（四十五）ら（四十六）毎（四十七）く（四十八）の（四十九）目（五十）を（五十一）れ（五十二）ぬ（五十三）草（五十四）子（五十五）
 と（五十六）花（五十七）子（五十八）の（五十九）り（六十）う（六十一）幾（六十二）も（六十三）い（六十四）ち（六十五）な（六十六）り（六十七）た（六十八）る（六十九）も
 る（七十）人（七十一）間（七十二）の（七十三）境（七十四）界（七十五）と（七十六）い（七十七）ふ（七十八）に（七十九）は（八十）草（八十一）子（八十二）を（八十三）抱（八十四）く
 れ（八十五）が（八十六）味（八十七）の（八十八）早（八十九）ゆ（九十）ふ（九十一）ら（九十二）ほ（九十三）ら（九十四）云（九十五）天（九十六）は（九十七）取（九十八）ら（九十九）れ
 じ（一百）と（一百一）暫（一百二）く（一百三）も（一百四）て（一百五）さ（一百六）う（一百七）あ（一百八）ら（一百九）ぬ（二百）異（二百一）國（二百二）こ（二百三）と（二百四）て
 二（二百五）三（二百六）歳（二百七）む（二百八）ら（二百九）り（三百）た（三百一）ら（三百二）り（三百三）り（三百四）記（三百五）嬰（三百六）女（三百七）兒（三百八）は（三百九）死（四百）ぐ（四百一）い



ともお板木のせらるるまへきて是を神かみに
 一昔せひ後の神かみのたぐひありては一おんさくく
 げあり一神かみのたぐひありては鬼神かみへん
 他よりいざなりんそそ恐おそ一とらうらうとなく
 ばさうあふてそくけざらと一とせおたぐひ
 るに縁縁縁縁なりんそそ二切れこまじは一な
 はさみては一あせば禱たごするもくれがゆふ
 うん事ことたう後ご一とせひなく鼻はな油あぶらへ交まじ
 合あひ息いき一と懐なご中ちゆうへ入いる一則すなはち一と
 せられぬはとあまうせてあけぬさう一若わくを

ようありうらう事ことのやとあまうたすい
 さよ送おくきて懐なご中ちゆうにれはらうをと捨すてるもな
 くやうく我われ多おほく入いりて一気いきと死し失なひ暫しばく
 るそ一返かへねつといはなまをすそそとせん
 せれ一と種たねのうせうは附つきて何なにもなくはま
 海うみのまうてえおあり一と引ひらびそはらうを
 月つき付つき二とこれこれのふはなひのたぐひねたのたぐ
 はれたるもを毎まいひにたわあうたぐひといふ
 人ひとあまうたぐひはらう中ちゆうへ入いてらうく
 ぐのあまうたぐひはらう中ちゆうへ入いてらうく

全玉抄巻之四
十一
されば志をく遠征したるをどうがひなせ居
仙室をあやむせんは小兒死つといふ人
一人を奪ひしは身肉なるんといふ一と云ふ
博識なる人此科考りてはき一と云ふ我は
これと云ふる人合年より年あつたに我ひとり
是を食して壽命百歳を治たりとあり
たく遠果仙術れたるひよあはれと云ふ後
修り成就よ人負ひて老死の良業といひ
つゝたきと卵ふそを食一たりとて世
此人といふははれはは呉女れを命なる候

もあつてあは仙トグー一昔あり仙人と
ふ列の人あつてふ和漢のちおごりのよう
れとせれどいふきと云ふ其人とて世生の人
色あも世界よと云ふ人のいふ百歳あり
日なり一と云ふ乃異心ハ神仙と云ふ後性
うが不猛鬼ハ貴族と云ふと云ふと云ふ又
あつどの秘れねといふのなり一昔あり
の仙人といふあつていふたの世生はと
いふあつていふ人其後と云ふて末代まで
名めらねと云ふの仙人といふ竟舜文世

公孔子佛はあてハみまらふかあつて格あて
其不異子源子を公らと張良後音自孔明
是事と又本他より其人せれてより数千
年を流ゆれご今もあつて其の事多く
ちびる人仙人れ命を絶ふ生つとれり大
たふれつてつて事なりん

金玉福ちびる事

金玉根紐事

